



叢書

服部文庫
117
K3
5



弓削物語

慕京集

太田道灌

閑窓餘樂

西山
婆娑女之掟

配所残筆

山鹿氏

雜説 不詳記者



弓削物語

弓削良貞 享保十四
八十

饑歲、糟糠と黄ミ其年、人指梁と破りて保平の
ありより王威日、陵夷して古より是也能中元弘、富士山
崩れより皇統二つが又加ふる悪文の大乱と経て文武
を柄とまへるとも皇統おひはれし織田公とて其後
公よりて皇統とさるゆへに、あはれ未タ是なり
大神君世にわかれい誠、よハ宸極と安んじ下ハ世と接せ
御神徳も中々思ひつる也あはれ御世にわかれ後継の徳
と敬し礼の曲と感ふふいふ、大猷院殿家光公也御建枝ハ

あはれと逆威とやういふ事氏をさむる事なりやういふ事
家康永禄九年十一月從五位下二の将は叙任てより後
所々朝意を受遂に任掬の極望ふ遂に制勅とてあて理
世安民の将職を奉る御は事々経るも報しむべき日
なり家康後友の如く心は密に於て上は宸襟とあへし
下は万民と救ふもの事ありきるは不意に今日某の如く
あひて職を継ぐ御は神明仙院の助る事也抑祖父英父ま
秀忠は古来の悪政を除く二教の伝承をありし所傳り使
わうよりて今天下安穩なりて牛馬釋より是併る事也
の御使ふいふ事も家康より治めたりと思ふ事也御は今

来り所よりいひて 敵意の御是愛よりをく在軍とて向ふ事
何と朝敵ありや普天の下平土の濱皆臣民なり来り
朝使は對し首よりいひて 討つる事也されどもいふ事
主とまゝして朝廷の言きと成るされは御の道人有まし
とも云ふ事とて上書御謀伐の後や御の逆臣出たり
朝廷を極へて國位と危ぶるも討つるしる御家の亡る
いふ事塵も惜むる事とて天照皇太神宮八幡大菩薩の御心
統を成り末候より某年より長久より祖父御をさむる
勲功より孫々朝廷に安し悪政は退け此國安民の事なり
消る家とていふ事深き御子細よりいふ事余りより情あり

只所傳授之止ありて寺社は附し中あり其より心安し
一日も寺社は附し永く秘閑して秘之を秘せり
再三傳入せりれ勅許ありて後傳授年由在位神皇極
の由を授けられ若江家靈光殿由再奥の事也此後思出
りせりといふ所傳授りられ大猷院極を社記と由傳授せり
その後傳授りて神社の傳授りて園東より由沙流之若江の
於系初回号と由云々なり此の由也

由在位の頃若江初号由再奥の事 家康公と執り又と
大樹と執りしる由傳授りて次男とて初回号人傳授相定
なり

但先皇位之退る尚て有由所傳也
八月

十二年十月より文政理に傳授りて由

勅作東照權現神像是より庭より靈光殿依雲東沙
沙流之屋近江靈光殿大満宮に相傳授りて永世
守護仕て為秘閑なり

同廿日從園東より傳授りて料金二百両由由文政十一月廿二日為
院所傳授りて家傳料金百両なり此の日廿二日從園所傳授り
附ありて根より秘閑なり初傳授りて宸筆園東の由傳授りて口伝

叔仲延彦曰廿二日公武は事宿有るに依りて後公武は和
懇めて風吹ても声あり而してふらゆる中にも小人とて
欲を利せんとて君の悪をむく媚諛を行て和膳を破んとす
そふた満ふ悪むし明日も狂風のため一時の妒雲と辞
さうして能くさうや東西所移れを小原よりしよやうと
う二胡小人の媚言を用ひむいふひ大内親正造營の思ひなり
て密に意を奪しなうやうと主張するものなりとて大
雅う謀逆の外を新中と知る人あり理長は初より禱下よ
侍なり昵迎の所あれば一日むらうとふたなり理長
つゝ思惟はる小枝相違うて旧号江と能く之を先全く

神君家光公の御執参也此は忠源公也且寛永の御時も
ありありとて由盟記のその像を奉渡する所とて何と云ふ
う公武の由ふ和とんやと一心決定して別家光公作の
るまで一巻とて保平以後の事跡とて以て忠諫とて此の
所禱を吹て底と求る人鬼角折損しむとて托柳し
ゆふと棄絶しぬる先制して再び冥途の御ふ審より復
た満きやと又一巻の筆記を執てをてて参りしれは逆鱗
甚し世知より禱下よ依し今尚昵をの所とて却る謗を以
以て所を顧むと極て漏脱しき故也とて御佩刀を抜きあひ
をふかうとていふゆふとてて後忠佩刀とありて

は所小刀の
所兼電作

當今後光明帝
仙院後水尾

鐸ハ赤銅金ツクリン
青海波今よりありあけまり出さるる退路執政ハ密啓し早々小人
理と棄絶しあやうく預め也臣一命と脱るる情むより臣陳意
とあき人も也然れは陳奏しつゝと父兄も不告伴狂て家
整閑と先は退去の時周章あき急きふたつと事也後日
出奔の汚名ありかて案は執政の極伺せむ一令く以る
由存知あきも也皆小人の詭計ありつゝと別以る事すはあつと
由存知あきも也先王様と制し由後難ありつゝ也於此
理長忠傳の本意と違ふる平時是安年間也ぬも後伴
狂の誓室を叶来きと門戸不開りぬ一人為る誓室を来
臨して曰公武一對した御と拙の候甚於國東威思ひも也

又由新祐のすゝ永世の依られ誓室ありぬ元は公武所長久
由武運强健修治と政也ぬ寛文三年從院中へ由はるる由
出は理長や次の人よりふたつ臣公武の所忠仰しは悲止かし
仍る所年和のすゝ忠傳とつて度知より昵近し身の君れ
由の小人なるふいひあつと一旦思ひは逆さるる思多し然れ
由の由は荒教して終へんもつて本意ありと固く以て辭し
り再三仰りて今更先心の忠傳と源へ感あり也是れ
再勤とつてあつたなり思ひは背きあへる由る飯俵茶心
と以て入道して号法山院中よりあふ密ふはあきて不使の由り
案やぬと心ぬの者より男子りりやあつて養子とよとや昇進

ききくゆと慰せんし理長養いし寸忠の誼を遂ぐとの事
ゆきゆとふしむる神祇や今日の有りさよふき一旦思
ふに世もさし思ひを養子までして名跡相續の事ありし社
は神祇の社人あり神祇も終りしと実子ありき二世を
終りしと上りきいけ今四十一歳男子ありきは其時ゆは勝
りて正はんさる違ふとゆふと理長もゆふもゆふ
りて退ききをいふの後ゆは如元孫地丹祇自重との事
祈禱修め也

菅神示現十地第一道明寺第二靈光殿河内中第三梶
折社第四若根崎第五細敷社第六安樂寺第七紅梅殿

第八文字天神第九上宮第十北野社也

追加

後水尾天皇御製

將軍家光公薨去ゆりし時
女院の四方へ作をなれり

あふふふふふふのふふふふ雲霞やし新しき思ふ
きありけり後の事ありきふふふふふふふふふふ
たふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

東照権現の十三回忌のついでに

ほととすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
梓弓八洲の波と浪をききききききききききききき

五條大藏卿次男

理長

從五位下主殿頭法名暗雲院法山理長大居士
寛文六年九月五日卒

長近

從五位下刑部少輔後宮内太輔
幼名梅丸候于伏見殿

長統

大膳大夫清國長時卿次男少納言致長朝臣弟
享保五年卒

長仍

正五位下式部權少輔後修理大夫幼名林九後改登長
東坊城資長卿次男前大納言綱忠卿弟

かつあきこころに 知れぬ世に けふも けふも けふも
氷川の中ら 奉納の 和歌進め ねたうて 残雪と
いふは けふも

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
氷始解

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
谷鳥

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
二月 新菜金 けふも けふも けふも けふも けふも けふも
の けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
聖供 けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
待花

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
待花

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
朝花

あきけ けふも けふも けふも けふも けふも けふも けふも
の 別當 長樂法師 すめりけ けふも けふも けふも けふも

秋はやうふ花のちをさるゝとて

思ふにやういのかふるゝ花のちをさるゝとてなむむん

とて
長樂法師

教をれのおうとてなむむん心はゆゑのまゝあふ成ハ

夕夜横え半人ふ夢想はわ秋初をせれしとき

紫けゆりもむむむむやうとてなむむん

あふ人のさうらや横見氏屋がむ勢ふあふ

いれもさうらやあふむむむむあふ

きぬとわひむむむむけの時ふむむむ

れむむむむむむのあふむむむむあふ

ふ

深あるふゝゝゝ神田の社やゝあふ

ゆりしとて

なれつむむむむむむむむむむあふ

小條其意入る則圖のぬゝ箋田とてあふ山庄

めゝあふひひひひひひひひひひあふ

堂法初大補あふむむあふむむあふ

の和歌すゑらむふふ新樹とてあふ

ゆりむむむむむむむむむむあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

尸せし星はみよのりいさきつわんとをいふ
鳥山時玉後叙（きり）記ふ中一侍りてありき
いふものしはゆかりし時今川氏兼期長は由緒
きりきり侍りてあんなむけむいふは
の府より侍友但るも盛重として尸つて
しは氏兼期長はいつ二日府のむかひ寺菩提
樹院より侍りてあんなむけむいふは
左馬尉宗雅一色勘解由貞俊をいふは
あんなむけむいふは宗寺はゆかり侍りぬ実社の社
雷の健徳の馬鳴のやうなふふのめさなむけ

侍りて侍りて

侍りて侍りて山のわきをすたひや我とあはれて
あつちうなふふのりきりていふはわき神垣
花多井中納言雅世は消是たてまつる派刺の依
料たてゆつて

一声はあつてあつて海は関のあつての山は
杖立日よ秋幸九え腹きり侍りて
りきり初めはあつて氏代の杖はあつてむきいふは
月夜性事

あつちうなふふのりきりたてて杖の目きり

月お迷懷

車わぬ心とわすれ我新しき心と照る月をうりし
権中納公為富々の心より三井寺の僧永是僧歌
のみちれとくちりつては消息つとくちりし
かりとくちのぬりたてはつて消息のち
ちりふふの月もわすれつとくちりし
細川勝元朝臣武備の要成弟子の心より調し
はるきとくちりしつとくちりし
さふさふとくちりしつとくちりし
り。

あふれやとくちりしつとくちりし
勝元朝臣短衣不成切といふ昌黎のつとくちりし
なとくちりしつとくちりし
ひつは

いそぐぬれとくちりしつとくちりし
人志れぬのあふれとくちりしつとくちりし
小條加賀車元の心より照る月をうりし
りつとくちりしつとくちりし
つとくちりしつとくちりし
もつとくちりしつとくちりし

紙のふ

康正元年の冬、源氏の役よりして、
 入陣し三日とていひあつたふなりぬ
 られども、源氏の武威つゞいて、
 ねむし終ふ自勝して、軍兵よめり
 けぬし終ふ自勝して、軍兵よめり
 のうに、松原のむれを、親小男あふ
 治承十一年、源氏の人世ふちつて
 屋敷小持持ちてきて、ゆりしふ

りねえとの首ふむひて

わうと記さるる余のううめかひをなれ成ともしきま
み

治部卿重頼

7

沈約詩重輕

常記所為誰忘此情不與系乃王年也
梅苑入枕之夢

梅苑入梳
子

人をいふき名やうんさうふあて状の枕小母不梅着番
イニは枕は物かゝる不梅の句ひ

イニ
枕子
割
毎
枚
の
重
み

寄鳥恋

世中ふとりもはくぬ里もふたりぬるは陽れあふえん
絶ふ事忘

絶不惑也

心は空なるゆゑに入来する星はちりちり

文安四年の夏飛鳥井中納言雅永のゆかりな
橋とよむやむすう作とゆりなれそな
まつりな

まろ

橋とふるやむいさうし
作とつるれそたて

ともぐら中ふとそへ極よりし音たれり水のさちち
 持葉の葉三つふたり侍る子とそをれをゆめて
 うしなひぬるつとあそこのうなつさともいと
 なみ侍るむさこつとふあひぬると命あうりれた
 らづりきやぬあへはともあそこのうなつさとも
 のもくといひつらうりきや

のちとひつうは

あひうゝすゝうめき月見ふれこゑのふをむて

持兼の妻迄

おどろく列れと記し今も馬れいとあひいさうん
建儀の系係りし時

君と記民やうつつ時夕よりえんとそ所とあわけあき

右二卷者太田持資入道道灌叟之平素之詠草也以
前静勝軒君西堂之藏本而寫之畢

天正元年三月下旬

侍従藤原朝臣共宗

此系本ハ大久保西山翁ハ君本忠信して書きと写しぬ

天明六丙午年二月

伴宿称資慶

閑窓餘樂

押山安富 字甚ち丈

青山百人絶言燈籠のうゝ 大猷院極楽寺の砌に追福のる
家々小盆中初は切菟とかけし中庭 上は春時より思ふ山麿
詞ありし今もある

古依りて山深陽輝と惚けし心あ 上はつらしより山の
字と惚けし心あ時古依りて心あ 思ふ山陽陽天祥る
奥の砌も花を毎年の字と惚けし心あ

ある面会して光姫豆郎しる小瓶をて口乞りて止と割へ
傍修驗あはれ名を罵りてあきし心あ 思ふ山陽陽天祥る
の醫師の入来りし心あ 思ふ山陽陽天祥る

父母よりてわが小室より心持す可し。ふ。ふ。

記所端業。山房甚喜。

我未成凡中者時多無徒短中。中。山。房。の。山。米。席。子。出。
庄は。者。之。如。知。り。し。時。分。不。似。合。人。今。存。る。山。房。之。方。山。水。
持。り。し。世。所。金。我。未。成。凡。中。者。時。多。無。徒。短。中。中。山。房。の。山。米。席。子。出。
よ。有。こ。し。天。命。と。思。ひ。し。毎。日。用。と。物。持。り。し。山。房。の。山。米。席。子。出。
野。外。の。山。房。の。山。米。席。子。出。八。重。の。山。房。の。山。米。席。子。出。
乙。子。七。十。待。文。と。云。大。方。後。多。九。重。の。山。房。の。山。米。席。子。出。
家。来。帰。回。車。と。物。持。り。し。山。房。の。山。米。席。子。出。林。乃。妻。老。子。子。仕。
度。中。影。入。山。房。の。山。米。席。子。出。山。房。の。山。米。席。子。出。山。房。の。山。米。席。子。出。
仕。り。の。山。房。の。山。米。席。子。出。山。房。の。山。米。席。子。出。山。房。の。山。米。席。子。出。

家内庭と地他なる取らるゝ由ありと云ふは、
此處よりき沙汰ありと云ふは、
中へおける津浦十々分、
こゝ中へおける津浦十々分、
ある迄に、
若き時より、
人々、
る軍法、
時、
依り、

此處よりき沙汰ありと云ふは、
口、
中へおける津浦十々分、
ある迄に、
若き時より、
人々、
る軍法、
時、
依り、

寛文六年十月三日、
月、

始安我言大道無疑天下無弁之夫罪我者罪周
公孔子之道也我可罪而道不可罪聖人之道者
時政之誤也古今天下之公論不可遁凡知道之
輩必逢大災其先蹤尤多乾坤倒日月
唯怨生今世而殘時世之誤於末代是臣之罪也
誠惶頓首

十月三日

山鹿甚五左衛門

北條安房守殿

是た致懐中より宛宛しりて之を以てしるに
 中より急あつたふききりてありと思ふ日本
 ちひ一字も後改りし事なし傳へて其辭也一
 等知りしより内通致方と知れは交内通致方
 此より能くしる事ありありと思ふに中より
 ありき方再び地にて集りて内通致方と知れ
 衣服食物居宅と修めし思ふに其辭も朝夕
 の中其辭も四月今日と日とありて其辭も
 了らば其辭も自らの心入るに其辭も内通
 其方ありてしる事ありし思ふに其辭も内通

有り又ハ忠と博とを待又荒述と云ふ小言も有りは物と云ふ
 正畢竟の實初眼の所云よりてめは成りて然れども我ハつり思
 量り小徒と云ふ人を感て免りのいふとて天自正の素衣裳
 而四海平カリ修文徳而敵自感服をいひて此を成る
 似也然れどもいふ事さういふ事し凡そ言ふは言ふ事さういふ
 ことやいふれは終ふ世と云ふも山林よはけて多敷く羣衆
 同ふ事さういふ事ありけりあていふ忠と博とを待又云ふ荒述
 と云ふ事さういふ事辭さういふ人偏見也と云ふ事さういふ
 仍有余力ハの言ふ事さういふ依り聖學に當る人より卑なり
 地位有り者業是ありき事さういふ事と云ふ事さういふ人を

邦と平カ不ありしに其功如名義の教を授けし我今我つり
むきとる所ふとて其倫の文跡いふ及んて武士の初より
其功ありとて武門に業大にふ多しあるなりし時に衣冠令り
家用法を武士の作法にても也時更武門の統長武具馬の
の製法多端ありて大なる天下法事及び礼樂、宗國教、制度山林
には海田畑寺社四民の公なる所限し不重政令各法軍法賞法城塞
鐵法弓馬いふ及んて是皆武將より武士にまで目付け業也
我つと學び已たり修り述べ所傳りしとて其つりて事あり
功立ふなりとて大中至正の聖學の爲に盡しに故に日記ある我
考へて其思案につくす小思誠敬靜居ありて自天下法

は後集の山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方

十月十二日

山形如方

尚書月廿四日海運使後集の山形如方と云ふ
此の山形如方は後集の山形如方と云ふ
小の山形如方は後集の山形如方と云ふ
周別公松浦北州公の山形如方と云ふ
中毎度山形如方は後集の山形如方と云ふ
公の山形如方は後集の山形如方と云ふ

を世傳の山形如方は後集の山形如方と云ふ
肥前公山形如方は後集の山形如方と云ふ
知又の山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ
山形如方は後集の山形如方と云ふ

十月十六日

山形如方

女の操ふむじひ也とて屋敷を出入る時の句

乃このむじげい馬よりつぎなり

そはゆきもききし作とありて屋敷は出入るのけい
りり娘て降りり村殿の屋敷の花の影ありけれい

さゆれとむじひと様うな

程の夕い敷の夕きて百負やとをひいといふ
浪花の他ふ浮瑠璃ふ作もる中多ういけ地の人なり
されと浮瑠璃いそ時のもと意て面中作りあはれのお
れい実もよたふと多しあらよき東の浮瑠璃ふハ
百屋だる悪きやうは作りぬと実い悪き者より寸

悪徳なるがうこあらよいふ器量かきしめて色もく
ききし形もてゆきしと宜うぬのこ又ぬよ夜人の家
娘てもききれて降り屋敷はけい八百屋へ嫁たり元々
おの玉名釣の生也とて此い徳洲濱松の家よりゆき
ありて此家の聲とありて寺町日野上人のありて南都
島福も屋敷よりし時そ屋敷の生後ぬは八百屋の男姑
のけいしりやうなありてやつらてふ屋敷降りて中
ちと庚申のおくとふ屋敷より屋敷申を浮瑠璃中作り
より又浮瑠璃のありておの家の今の子屋敷川橋を
源とて峨佛と表徳して人のききし者也今よき家なり

とて是後唐ふぬきあつて安永四年の辰に就きて山
者山法師実延の末より系しつた村梅川と云ふといふ
しるもといひつゝより小作りなる女ありといふ

おま長あつて桂川とてそのまゝ宝暦九年の辰のまゝ今と
常井留屋といふ所り是も長あつて一處に西横堀佐渡屋
と云ふ別家におまの一家也田宮氏由藏の姉におまの姉と
幸子あなまといふもこれとおまの紅蓮といふもあつて
長あつてそのまゝといふ所り是も長あつて一處に西横堀佐渡屋
と云ふ別家におまの一家也田宮氏由藏の姉におまの姉と
幸子あなまといふもこれとおまの紅蓮といふもあつて
長あつてそのまゝといふ所り是も長あつて一處に西横堀佐渡屋
と云ふ別家におまの一家也田宮氏由藏の姉におまの姉と
幸子あなまといふもこれとおまの紅蓮といふもあつて

は川に流れてもそのまゝ自あつてといふにたふしにたふしに
海もいふ所り是も長あつて一處に西横堀佐渡屋
と云ふ別家におまの一家也田宮氏由藏の姉におまの姉と
幸子あなまといふもこれとおまの紅蓮といふもあつて

紀海音の作もあつて徳永の海陽理は海をいふ
おまの姉といふ所り是も長あつて一處に西横堀佐渡屋
と云ふ別家におまの一家也田宮氏由藏の姉におまの姉と
幸子あなまといふもこれとおまの紅蓮といふもあつて
長あつてそのまゝといふ所り是も長あつて一處に西横堀佐渡屋
と云ふ別家におまの一家也田宮氏由藏の姉におまの姉と
幸子あなまといふもこれとおまの紅蓮といふもあつて

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a single column on the right page of an open book. The script is dense and flowing, characteristic of early modern handwriting. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

